

やまなし

2017.12.1

vol.15

no. 1

contents

- 2 | 電子情報と藤原道長
 - 4 | 図書館利用者の声
 - 5 | 学生にすすめる本
 - 6 | 図書館統計
 - 7 | 図書館トピックス
 - 講演会
「太宰治『富嶽百景』を読みなおす」を開催 [本館]
 - ミニコンサート「歌と室内楽」を開催 [本館]
 - 映像資料視聴機器の更新 [医学分館]
 - 8 | 講演会
「Whole Person Care」を開催 [医学分館]
- 今後のイベント紹介 ほか

The Yamanashi
Bulletin of the University of Yamanashi Library

Forever
and ever

電子情報と藤原道長



山梨大学附属図書館 館長

イケダ ナオタカ
池田 尚隆

4月から、6年ぶり2度目の附属図書館長を務めることになりました。

館内の設備は大きく変わりました。皆さんもよく御存じのように、個人で静かに読書したり、学習したりするだけでなく、グループでさまざまに課題に取り組むスペースができました。1階と2階にあるラーニングコモンズで、利用者もたいへん多くなっています。今や、新しい学習のあり方、アクティブ・ラーニングを支える図書館の顔といってもいいでしょう。

館員の仕事は、一見あまり変わっていないようにみえます。多くの本の購入や整理、資料収集の相談や図書館の利用促進に努力してもらっています。

しかし、目には見えにくいのですが、実は電子資料の扱いが大学図書館の重要な任務になってきています。東京工業大学附属図書館長の山室恭子さん（専門は日本史）が、9月10日付の朝日新聞の書評欄（対象は、新藤透著『図書館と江戸時代の人びと』柏書房）で、江戸時代の「図書館長」さん3人との仮想会議の様子を書いています。

（山室）そうそう、私どもの図書購入費の7割以上は電子ジャーナルなどカタチのない本なんですよ。

一同「カタチのない本、なんじゃそりゃあ??？」

日本の古代文学が専門の私などは、この江戸時代の図書館長さんたちとほとんど変わらない人間です。しかし国立大学図書館協会の総会（今年は6月に千葉で開催）でも、話題のほとんどが電子資料に関わるものでした。オープンアクセスやオープンサイエンスが1番のキーワードで、従来の電子ジャーナル利用にとどまらない、学術情報のオープン化による研究の推進・拡大が、大学図書館にも求められています。6年前には聞いたことのない話ばかりで、せめて何とか理解できるようになりたいと思いながら帰ってきた次第です。

話は変わりますが、この9月に『藤原道長事典』が刊行されました（思文閣出版）。私も編者の1人です（実は、ほとんど編集には関わっていないのですが）。藤原道長の日記『御堂関白記』から、道長やその時代を探ろうとする試みです。その際に、ちょっと面白い経験をしました。

項目の1つ「女方／女房」の執筆を依頼されました。読みは「にょうぼう」で、①妻の意と、②貴人に仕える比較的身分の高い女性の意で用いられます。「女方」というのは、道長独特の当て字です。『御堂関白記』のなかではよくみる語ですが、いく



つ用例があるか考えたことはありませんでした。そこで東京大学史料編纂所が公開している「古記録フルテキストデータベース」を調べました。その威力はすごいもので、すぐに「女方」が523例、「女房」が18例あることがわかります。このデータベースがなければ、何日もかかったでしょう。

しかし電子情報のありがたさもそこまで。①の意か②の意かは、いちいち前後の文脈をたどって検討しなければなりません。①か②か、あるいはどちらとも決められない例もあります。「正」の字を書きながら数えるという、昔ながらの作業を何日も続けて検討したところ、妻の意の用例が300弱あることがわかりました。そして、道長には源倫子、源明子と



いう2人の妻がいますが、「女房」は、源倫子だけに使われていたのです。源明子はその居所により、「近衛御門」と書かれます。当時はむしろこちらが普通です。それに対し、「女房」の語は、今もそうですが、謙称であり、親しみも併せ持っています。源倫子は、今でいう正妻さんと考えてよいでしょう。

平安時代の男性貴族の日記は、儀式や政務に関する記事がほとんどです。妻の意の「女房」が300例も出てくことに、改めて驚きました。そこでまたデータベースを使い、道長以前、あるいは同時代に、妻の意で使われた例があるのかを調べてみました。道長の祖父師輔の日記『九暦』と、同時代の藤原実資の『小右記』、藤原行成の『権記』にみつけましたが、それぞれ10例に満たない程度です。道長だけが妻である源倫子の存在を常に意識し、当時の常識を越えて、日記に書き付け続けたとあってよいでしょう。

実は来年は、道長がああ有名な「この世をば我が世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」の和歌を詠んでから、ちょうど千年になります。全くといってよいほど注目されませんが、この傲慢とも思える歌が嫌われていることもあるのでしょうか。しかし、案外、妻思いで、一緒に過ごすことが多かったという彼の日常がみえてきたのです。

『九暦』『小右記』『権記』を見落としなく調べるには、確認も含めると、やはり膨大な時間がかかります。電子情報により、それが瞬時に可能となりました。もちろんただデータベースを利用させてもらったというだけのことで、現在の大学図書館の課題とは比べるべくもありません。しかし、電子情報によって、1000年前の人物の新たな人間像が浮かび上がるという経験は、江戸時代人に近い私にとっては新鮮なものでした。そしてそのデータを生かすには、従来通りの手作業も欠かせません。それはまたそれでうれしいことです。

新しい課題にはなかなか適応できませんが、何とか図書館のため、研究の進展のために役立ちたいと願っております。



本館2F参考書架 210.37

文献複写のプロに助けられながら

医学部 放射線医学講座 医局事務

ワタナベ ユキエ
渡邊 幸江

医局に勤務するようになって早いもので5年。この間、数多くの文献を検索し、図書館司書のみなさまには大変お世話になってきました。

思い起こせば、この5年の間には一度に100件もの文献複写を依頼された記憶がよみがえります。時間との闘いの中、懸命に一つずつ検索してはPDFで取得し、取得できないものは複写依頼。この手続きは、単純な作業ではありますが、他の業務も重なる中、いかに素早く探すが重要となってきます。司書の皆さんにアドバイスをいただきながら、今では、すっかり慣れ素早く対応できるようになりました。

自分なりにとことん検索し、これはPDFではとれないと思い、最後の最後に図書館に依頼をすると、なんと司書の方々は、いとも簡単にPDFで取得！あ～今回も負けた、完敗！さすが司書！と悔しさが感嘆へと変わります。

探している文献の情報が少なく、自分では探し出せない文献についても司書の方々は少ない情報を頼りにとことん探してくださいませ。検索方法がわからない時には、電話で丁寧に教えてくださったり、時にはPCの前で一緒に検索してくださったりすることもあります。

最近では、紙にコピーされた文献をデータにしてほしいという先生が多くいらっしゃいます。紙をデータ化する際、図表がつぶれてしまうことが懸念されます。少しでもいい状態で先生方にお渡しできるよういつも心がけています。

これからも司書の方々に手助けいただきながら、先生方の研究活動のお役にたてるよう微力ながら精一杯頑張っていきたいと思っております。

私にとっての図書館とは

大学院医工農学総合教育部

生命環境学バイオサイエンスコース修士1年

タグチ エイジ
田口 瑛司

私が山梨大学に入学した当初はリニューアルされる前の図書館でした。リニューアル前の図書館は今のよう二階にあるグループディスカッションルームや、一階のラーニングコモンズ等の先端的な図書館ではなく、机と本が陳列されている一般的な図書館でした。元々図書館という空間が好きだった私は一年の頃から足しげく図書館に通っていました。それまで図書館とは友達がいる大きな声ではしゃべらず、各々が机に向かって読書をしたり勉強をしたりする静かな場所というイメージでした。それが二年生になった初めにリニューアルオープンされた図書館に行ってみて今までのイメージが崩れ去りました。

新しくなった図書館は、一階では軽い食事をとりながら談笑したり、動くメモ台付のチェアを使い人数に合わせて自分達で好きな配置をつくりながら議論を重ねたり、大型ディスプレイやプロジェクターで投影してプレゼンができるスペースとなっていました。二階は従来の本棚と机が並んでいるスペースの奥にガラス張りの壁を挟んで仕切りのない長い机が複数置かれ多人数で会話しながら勉強ができるグループミーティングルームと、横の机と仕切りがつけられ静かな空間で一人勉強に集中したい人向けのサイレントルームがあります。この新しくなった図書館は時代のニーズに応えた静と動を兼ね備えたこれまでにない最先端な図書館というイメージを受けました。

この新しい図書館は今までにない学習の可能性に満ち溢れていると私は思います。まだ私が知らない未知の機能もたくさんあるかもしれません。是非学生の皆さんはもっと図書館を利用してほしいです。



真淵と宣長

「松坂の一夜」の史実と真実

田中 康二 著
中央公論新社

「松坂の一夜」という話を知っているだろうか。
宝暦13(1763)年5月、松坂(現・三重県松阪市)

で医業の傍ら古典文学を研究していた本居宣長が、私淑する先人、賀茂真淵と松坂の旅籠で対面を果たした一夜の話である。この時の語らいが機縁となり、宣長は真淵の研究を受け、学問を大成した。しかし、歴史に残る大物対談はまさに一期一会、江戸在住の真淵から書簡による指導を受け続けたものの、再会することはなかった。戦前には、小学校国語の教科書や修身の教科書に載せられ、誰もが知っていた美談である。戦後になり「松坂の一夜」が教科書から消えたのは、戦争賛美、日本精神の掲揚という忌まわしい記憶の封印と無縁ではあるまい。著者によれば、本居宣長の学問は、戦前、軍国主義のイデオロギーに利用され、本質が歪められたという。この経緯は著者の前著『本居宣長の大東亜戦争』(ペリカン社、2009年)に詳しい。

さて、「松坂の一夜」は「史実」であるが、本書では語る者にとっての「真実」が幾通りもあることが明らかにされる。教科書も物語のバリエーションの一つに依拠しているにすぎない。本書はドキュメンタリー映画さながら、8人の人物にスポットライトを当て、それぞれにとって「松坂の一夜」とは何であったか、8人8様の物語を残された記録から検証している。そもそも「真実」とは何かを考えさせてくれる。学ぶ意義を問うてみたいと考える多くの学生のみなさんと、図らずも真実の迷宮をさまよっている人にお薦めしたい。



教育学部 言語文化教育講座／言語教育コース

ハセガワ チアキ
長谷川 千秋 教授



知の技法

小林康夫, 船曳建夫 編
東京大学出版会

★ 本 館 書庫・一般書架和 002
★ 医学分館 2F 開架図書(第二) 002

この本は私が大学1年生の時に会いました。
1993年から東京大学の教養課程での基礎演習の

テキストとして用いられている本です。ここで取り扱われるものは高校までのいわゆる「勉強」とは異なる、大学生として皆さんが考えるべき「知」とは何か、どうあるべきかを議論するものです。大学は教授から学生への単純な知識の授受の場では無く、むしろ普遍的な価値をどのように生み出すか、この本では「知の行為」という風に表現していますが、大学教員と学生が対等な立場で説明し、反論し、反駁し、更新する、その方法論に関して文系領域の複数の学問を主題にして議論しています。

このような内容が東京大学の教養課程で取り入れられているのは、ずいぶん前から議論されている「リベラル・アーツ」の必要性からだろうと感じます。リベラル・アーツとは、日本の大学のような職業専門教育のような教育システムではなく、広い視野から総合的に判断し、知識を批判的に取り入れ、社会においてリーダーシップを発揮できる人材の育成を目標とするものです。昨今、社会から要請される学生像とはまさにそのようなものだと感じますが、リベラル・アーツの考え方の一端をこの本を通じて感じ取れるのではないのでしょうか。自分の専門とは異なる学問領域の考え方を垣間見る事は非常に面白いと思います。是非一度手にとって見て下さい。



シノザキ ヨウイチ
医学部 薬理学講座 篠崎 陽一 講師

1 図書館利用統計

(1) 開館日数・入館者数

区分	開館日数	入館者数(人)		
		学内者	学外者	合計
本館	288日	137,904	1,194	139,098
分館	288日	166,704	197	166,901



(2) 館外貸出冊数・参考調査取扱件数

区分	館外貸出冊数(冊)				参考調査 件数
	学生	教職員	学外者	合計	
本館	23,178	2,958	815	26,951	1,956
分館	11,144	2,788	184	14,116	2,623

(3) 相互利用

区分	貸借(単位:冊)		文献複写(単位:件)	
	貸出	借受	受付	依頼
本館	263	233	923	784
分館	44	153	1,211	1,441
合計	307	386	2,134	2,225

(4) 子ども図書室

開館日数	94日
入室者数	835人
貸出券発行人数	41人
蔵書冊数	4,487冊
貸出冊数	521冊

2 図書館蔵書統計

(1) 図書・雑誌蔵書数 (H29.3.31現在)

区分	図書(単位:冊)			雑誌(単位:種)		
	和図書	洋図書	合計	和雑誌	洋雑誌	合計
本館	338,001	125,775	463,776	7,379	2,458	9,837
分館	55,575	42,405	97,980	2,144	1,325	3,469
合計	393,576	168,180	561,756	9,523	3,783	13,306

(2) 図書・雑誌受入数 (H28年度)

区分	図書(単位:冊)			雑誌(単位:種)		
	和図書	洋図書	合計	和雑誌	洋雑誌	合計
本館	2,293	58	2,351	2,028	141	2,169
分館	1,183	22	1,205	456	84	540
合計	3,476	80	3,556	2,484	225	2,709



講演会「太宰治『富嶽百景』を読みなおす」を開催



平成29年7月8日(土)、附属図書館本館1Fにおいて、大東文化大学専任講師の滝口明祥氏をお招きし、「太宰治『富嶽百景』を読みなおす」と題した講演会を開催しました。

この講演会は、附属図書館所蔵の近代文学文庫に関連したイベントとして実施されたもので、当日は、一般の方、学生、教職員など約30名が聴講しました。

講演では、滝口氏が井伏鱒二を通じた太宰治と山梨とのゆかりや、作品の書かれた時代背景や教科書本文の問題、作品の読み方の可能性などについて幅広く講義しました。聴講者はみな熱心に聞き入り、講演後の質疑応答も盛り上がりました。

また、講演会終了後、2階展示室に移動し、企画展示「激動の昭和文学—横光利一、川端康成から坂口安吾、太宰治まで」を見学しました。見学は始終和やかな雰囲気、展示資料や作家にまつわる文学談義が繰り広げられました。

なお、今回の展示は、学芸員課程の授業科目「博物館資料論」の実習も兼ねて学生たちが展示ケースへの搬入等の作業を行い、見学時には各自が工夫した点を参加者に説明する場面も見られました。

* 関連常設展「激動の昭和文学—横光利一、川端康成から坂口安吾、太宰治まで」本館2階第一展示室にて公開中です。



ミニコンサート「歌と室内楽 ～お昼のひとときに音楽を♪～」を開催

平成29年9月29日(金)、甲府キャンパス附属図書館において、「歌と室内楽 ～お昼のひとときに音楽を♪～」と題し、日頃、教員の指導を受ける学生によるミニコンサートを開催しました。

今回は、11月20日に行う「山梨から放て！芸術文化のバイブレーション2017—山梨大学と官・民が連携した地域アートマネジメント人材育成事業の飛躍—」による企画から、コンサートの一部を披露しました。

コンサートでは、山梨大学アカデミックコンソートによる「ショスタコーヴィチ/バレエ音楽より」「バーンスタイン/ウエストサイドストーリーより」の演奏や山梨大学アカデミックワイヤによる「オペラ《ヘンゼルとグレーテル》より“夕べの祈り”」や「ぜんぶ」の合唱などがありました。

地域の皆様や学生・教職員50余名の参加者があり、奏でられる美しい歌声や音色に聴き入っていました。



医学分館 映像資料視聴機器の更新



附属図書館医学分館では、視聴覚室および大学習室に大型ディスプレイおよびVHS/DVDプレーヤーを新たに設置しました。視聴覚室では、グループで、DVD等の映像・音声の視聴による勉強会に対応できます。また大学習室では、DVD等の再生のほか、パソコンと接続し、発表の練習やグループディスカッションも可能となりました。

講演会



「Whole Person Care ～心を調べ、心を開き、心を込める～」を開催



平成29年11月17日（金），医学部キャンパスにおいて，京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻の恒藤暁教授をお招きし，「Whole Person Care ～心を調べ，心を開き，心を込める～」と題した講演会を開催しました。

この講演会は，附属図書館医学分館内に常設されている「生と死のコーナー」の関連行事（平成29年度附属図書館医学分館地域貢献事業）として実施されたもので，当日は医学生，教職員，地域の医療関係者，一般の方など約160名が聴講しました。

講師の恒藤教授は，日本緩和医療学会，日本ホスピス緩和ケア協会，および日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団の理事を務めており，我が国の緩和医療分野における第一人者の医師です。本講演では，まず「Whole Person careとは何か」「緩和ケアの定義」について説明し，苦痛と苦悩へのアプローチの違い，「治療」が医療従事者に頼るもので，問題へ対処するものに対し，「癒し」は患者自身が源で，病氣と対峙し，変化を受け容れていくものと話されました。また，自己ケアの実践について，「自分を知ることが，自分を大切にすること」「自分を大切にすることが，人を大切にすることにつながる」とし，自己への慈しみが他者への慈しみにつながると話されました。

参加者からは，多くのメッセージが寄せられ，「病棟では治療することに意識が強く向きがちだが，苦悩に対するケアも深めていきたいと思いました。」「講義を受講し非常にすがすがしい気持ちになりました。」などの感想がありました。

今後のイベント紹介

申込必要

平成29年度山梨県・山梨大学連携事業

「子どもの読書オープンカレッジ」のご案内

- * 第4回 12月 8日（金）文教大学名誉教授 中川素子氏による講演
- * 第5回 2月 1日（木）埼玉県三芳町立図書館館長 代田知子氏による講演（予定）

【お申し込み・お問い合わせ】

山梨県立図書館サービス課 子ども読書推進担当 〒400-0024 甲府市北口二丁目8-1

TEL 055-255-1040（代） FAX 055-255-1042

主催：山梨県立図書館・山梨大学附属図書館子ども図書室

◆イベント詳細については，ポスター・パンフレット・山梨大学附属図書館ホームページ等でお知らせいたします。皆様のご参加をお待ちしています。

学外の方への利用案内

本館及び医学分館は，山梨大学以外の大学生をはじめ一般の方々も利用できます。詳細については，<http://lib.yamanashi.ac.jp/>をご覧ください。本館 Tel:055-220-8066（情報サービスグループ），医学分館 Tel:055-273-9357（医学情報グループ）にお問い合わせください。



● 表紙：「Forever and ever」
場所：医学部（大学職員 撮影）

山梨大学附属図書館報

「やまなし」
第15巻第1号

2017年12月1日 発行

編集：館報編集委員会

発行：山梨大学附属図書館

〒400-8510

甲府市武田四丁目4-37

TEL 055-220-8063